音楽の聴き方：聴く型と趣味を語る言葉

岡田暁生著　中央公論新社 2009（中公新書）

経済学部教授　寺尾 格

音楽を楽しむのに理屈はいらない。好きなサウンドは、それが何かを知らなくても、ビビッと感じるし、つまらない音楽は何度聞いてもつまらない。私には私の音楽の好み、趣味がある・・・と、これを難しく言えば「美的判断」と言いますが、さて？と立ち止まって考える大切さに気付かせてくれる本です。

「クラシックなんて退屈！」「ロックなんて騒がしいだけ！」「ジャズなんて…」「演歌なんて…」「現代音楽なんて…」と、自分でも意識しない「型」にとらわれて聴くことは、実は誰かに「操作」されているのかもしれないし、場合によっては「偏見」と結びついているのかもしれない。アタリマエと思っていたことが、実はアタリマエでないことに「気づく」のは、大学という場で出会う最も貴重な経験のひとつでしょう。

せっかくの「未知との遭遇」のチャンスを、偏見で逃してしまうのはモッタイナイです。例えば「音楽を聴く」ことが、どのように広く、深い問題を隠しているかを、自ずから明らかにしてくれます。要するに、「受け身」ばっかりじゃダメだよ…ということなんですが。

ソウルフルな経済学：格闘する最新経済学が1冊でわかる

ダイアン・コイル著
室田泰弘、矢野裕子、伊藤恵子 訳
インターシフト（発行）合同出版（発売）2008

経済学部教授　中西 泰夫

最近の経済学の最先端ではどんな研究や分析がなされているのか？そんな問いに答えてくれるのが、この「ソウルフルな経済学」である。

近年の経済学は、難解な数学や統計手法を使っていて、とてもわかりにくいという声がしばしば聞かれる。

本書は、数学や数理統計学は全く使わずに、戦後の経済理論の発展を背景にして、いわば経済学説史的に展開していく中で、最近の最先端の経済理論を紹介していく。そこでは、経済学と現実との関わり合いや、実際のデータとの関連を重視して話されていく。したがって、最近の最先端の経済理論に無理なく触れていくことができる。

経済学は、伝統的に国の経済運営や経済成長といったテーマを追求していたが、本書では、むしろ最近の、心理学、社会学、はては脳科学とコラボレイトした経済学の学際的な部分が豊富に紹介されている。そうしたところから経済学の今後の発展性を感じさせてくれる。

本書のタイトルは、経済学が、「幸せ」、「幸福」に貢献すべき学問であるという著者の思いからつけられている。